

# 岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第X報）

——塚・下開田のわらべうた——

高 木 靖 弘・仲 野 悦 子

## An Interim Report on the Oral Literature of Tokuyama Mura, Gifu Prefecture (X)

—— The WARABEUTA in Tsuka・Shimokaiden ——

Yasuhiro Takagi and Etsuko Nakano

We have investigated on the oral literature, wishing the creation of culture for the sound development of children. In this paper we report on the WARABEUTA in Tsuka and Shimokaiden, Tokuyama Mura.

### は じ め に

ここに報告する「岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告（第X報）——塚，下開田のわらべうた——」は，同標題第I報（本学紀要第五集所載），第III報（同第六集所載），第VI報（同第七集所載），第VII報（同第八集所載）につづくものである。

今回の調査は，揖斐川本流東谷川沿い最奥の塚地区と，最下流下開田地区に入った。この調査報告も，最終段階に入り，残すは，本郷の対岸上開田地区のみとなった。

塚地区では，8月27日，9月25日の2日間に亘り，世代の異なるところから，合わせて16曲を，下開田では，9月25日の午後に入り，11曲を採集することが出来た。この中には新たに見出した曲，2曲があり，貴重な資料を加えることとなった。

我々の資料も，今回の27曲を加えて合計89曲にも達し，徳山村内に現存するわらべうたのおおよその傾向を知るカギたり得る数が得られたものと思われる。したがって，上開田地区を残すものの，第一段階の「岐阜県徳山村の口承文芸に関する調査報告」は，一応の区切りをつけたいと考える。

## I

## 〈調査地域及び、期日〉

岐阜県揖斐郡徳山村塚

梅本まさえ氏宅にて

1982年 8 月27日 午後2：00～4：30

岩須あきの氏宅にて

1982年 9 月25日 午後7：30～9：30

徳山村塚地区は、揖斐川本流東谷沿い、一番奥に位置する集落で、本郷より約7 kmのところにある。戸数30戸余、人口100人足らず、徳山小学校塚分教場の生徒は、本年度2名である。村内で一番小さな集落である。

岐阜県揖斐郡徳山村下開田

大牧富士夫氏宅にて

1982年 9 月25日 午後3：00～5：00

岐阜市より、車で国道303号線を経由し、揖斐川沿いに上って、徳山村へ入る経路の一番最初にたどりつくのが、ここ下開田である。徳山村の中心地本郷に至るには、さらに上流に上り、揖斐川を渡って、約1.3kmの距離をへだてた所にある。

下開田地区の人口は、約50世帯、150名弱であり、日常の生活は、本郷と密接なつながりをもっている。ここには分教場はなく、子ども達も、本郷の本校まで通学している。

## 〈演唱者について〉

今回の調査では、新たな地区ということもあり、演唱者の紹介を、徳山小学校塚分教場教諭篠田通弘氏、徳山中学校教諭大牧富士夫氏に、一方ならぬお世話をおかけした。

塚地区に於ては、篠田氏より、小沢喜治氏を紹介され、小沢氏の実姉にあたる梅本まさえ氏、それに小倉あきえ氏の二名の演唱者を得ることが出来た。さらに、篠田氏には、前記二名の演唱者とは世代の異なる、岩須あきの、橋本美代、横田志ず子の三名の演唱者も紹介頂いた。なお、横田志ず子氏は、前記梅本まさえ氏の長女にあたる。五名の演唱者のいずれもが、塚に生れ、塚で成人し、現在に至っている。

下開田地区に於ては、下開田在住の大牧氏に、宮崎とき氏、江崎さき氏の二名の演唱者を紹介頂いた。さらに、採集にあたっては、大牧氏宅を、お借りして、聴取させて頂いた。二名の演唱者もやはり、下開田に生れ、そこで成人し、現在に至っている。

今回の七名の演唱者のいずれもが、世代の相違にもかかわらず、若い頃、都市部の繊維労働者とし

て働きに出た経験を持っている。

以下に、演唱者の生年月日を記す。

梅本まさえ（塚） 1904年（明治37年）3月3日  
 小倉あきえ（塚） 1909年（明治42年）8月25日  
 岩須あきの（塚） 1922年（大正11年）12月19日  
 橋本美代（塚） 1924年（大正13年）3月13日  
 横田志ず子（塚） 1928年（昭和3年）1月10日  
 宮崎とき（下開田） 1902年（明治35年）9月16日  
 江崎さき（下開田） 1899年（明治32年）9月26日

## II

### 〈塚のわらべうた〉その1

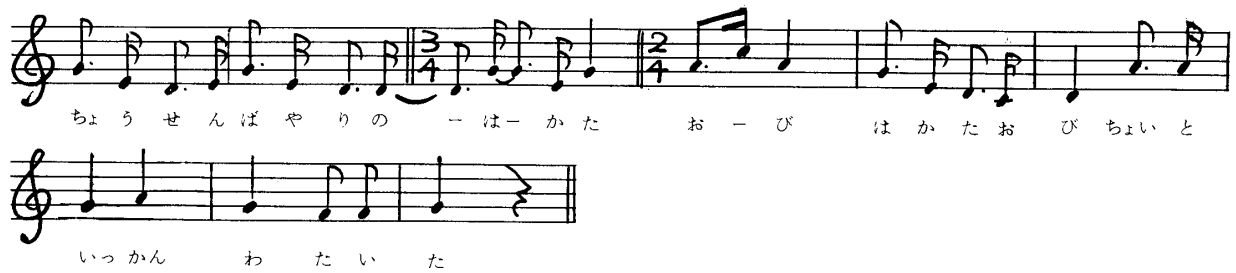
#### 63. こっから見えるは（てまり唄）

演唱者 梅本まさえ

No. 63



こっから見えるは なごやや ないか なごやの こどもは  
 じんじょな こども ななつ やつから べにおし ろいで  
 ごもんの そとへと あすびに でたら おわかい しゅうや－  
 こわかい しゅうに だきしめ られて おちちが いたいに  
 はなして おくれ おちちが いとても はなせん からに  
 おぼんが く るや ら おびかって おくれ あかいが よいか－  
 しろいが よいか あかいも いやが－ しろいも いやが



(出発実音ホ, M. M. 128 採譜高木)

## 歌詞

こっから見えるは名古屋やないか  
 名古屋の子どもはじんじょな子ども  
 七つ八つから<sup>べに</sup>紅 おしろいで  
 ご門の外へと<sup>あそ</sup>遊びに出たら  
 お若い衆や、小若い衆に抱きしめられて  
 お乳が痛いに離しておくれ  
 お乳が痛ても<sup>いと</sup>離せんからに  
 お盆がくるやら帯買っておくれ  
 赤いがよいか 白いがよいか  
 赤いもいやが 白いもいやが  
 ちょうせんばやりの 博多帯 博多帯  
 ちょいと いっかんわたいた

旋法は、ド・レ・ミ・ソ・ラの陽旋法で、核音はミ・ラである。同歌は、本郷(曲番9)、門入(曲番24)、山手(曲番39)、樋原(曲番57)、さらに後述の下開田に見出すことが出来る。ことに隣接地区樋原の清水氏の歌ったもの(曲番57)と比較してみると、全く同一といってもよく、旋律的にも、言語的にも極めて些細な違いを見出せるに過ぎない。

演唱者が語った手まりづくりについてここでふれておくことにする。当時のまりは、糸まりで、綿を芯にして、その上へ糸を巻きつけて自分達で作ったそうである。いかにも徳山らしいのは、芯にする綿に、綿花の綿ではなく、ぜんまいの綿を使った点である。すなわち、ぜんまいが芽を出す時に綿をかむって出てくる。その綿を集めて芯にしたのである。出来上ったまりは、普通の綿で作ったものより、よく弾んだそうである。

## 64. さんがんまえがみ (てまり唄)

演唱者 梅本まさえ



さんがんまえがみ誰分けた うつくしやーうつ  
くしや しじゅう ごもん に きりわけ て きりた  
きりめにはなさか しょはなはなにばなーはなはきょうばな  
きょうつづき えどは えどばな えどつづき えどの わかいしゅうが  
ーはーれ たそな ほれたそな ちょいと いっかん わたい た

(出発実音へ, M. M. 128 採譜高木)

## 歌詞

さんがんまえがみ誰分けた  
美しや 美しや 四十五文に切り分けて  
切りた切り目に、花咲かしよ  
花はなに花 花は京ばな \*京つづき  
江戸は江戸花 \*江戸つづき  
江戸の若い衆が 惚れたそな惚れたそな  
ちょいとさんがんわたいた

\*京つづき・江戸つづき……京つつじ・江戸つつじ

この歌は、返し唄として歌われたとのことで、前の唄が、「さんがんわたいた」と歌われた時に、引き続き歌われたとの説明がなされた。それにしては、最後が、また「さんがんわたいた」では矛盾するけれども、一かん、二かん、三がんと歌いつがれたものと思われる。山手の「ここのおとらの前髪は」（曲番41）や、後述の下開田「おとらの前髪」（曲番80）とは同歌と思われるが、返し歌として歌われたことから、出だしの部分と、歌われ方に明らかな違いが見られる。

旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の音列をもつ陽旋法で、ソが核音である。後半に至ってさらにレ、ミ、ソ、ラ、ド、が加わる。

## 65. れんげの花と桜の花と (てまり唄)

演唱者 梅本まさえ

No.65

れんげの花とさくらの花と むすびあわして  
 たすきにかけて ごんげん どうへー ごふくにまいて  
 いちもんこえてーにーもんこえて さんもんながらも  
 きりりとまいて むこのやまにーひかるはなんじゃ  
 つきかほしかーほたるのむしか つきでもないがー  
 ほしでもないが じゃのめのじゃのめのー じゃのひかり  
 じゃのひかり ちょいと さんがん わたいた

(出発実音へ, M. M. 116 採譜高木)

## 歌詞

れんげの花と桜の花と 結び合わせてたすきにかけて  
 権現堂へ ごふくに参って  
 一門越えて 二門越えて 三門ながらもきりりと参って  
 向こうの山に光るは何じゃ  
 月か星か ほたるの虫か  
 月でもないが 星でもないが  
 蛇の目の蛇の目の 蛇の光 蛇の光  
 ちょいとさんがんわたいた

この歌は、前曲(曲番64)へつづく例として歌ってくれたものであり、最後の詞が「さんがんわたいた」

した」となっている。同歌が、本郷でも見られ(曲番11)、旋律的にも、言語的にも殆んど差異はない。ここ、塚地区での歌われ方から推察するに、てまり遊びに於て、種々のてまり唄を、それぞれに歌いつないでいく遊び方があったと考えるに難くはない。

旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の音列を使った陽旋法で、核音はソである。

# 66. ここのおきく （てまり唄）

演唱者 梅本まさえ、小倉あきえ

№66



こ　こ　の　お　き　く　は　な　ぜ　も　の　く　わ　ん  
は　ら　が　い　た　い　か　な　つ　や　み　す　る　か  
は　ら　も　い　と　な　い　な　つ　や　み　も　せ　ぬ  
は　ら　に　ね　ね　こ　の　つ　ぼ　み　が　で　き　て  
う　む　に　や　う　ま　れ　ず　お　ろ　す　に　や　お　り　ず

う　ま　れ　た　こ　ー　が　ー　お　と　こ　の　こ　な　ら　き　ょう　ー　へ　あ　が　っ　て  
(の　ぼ　り　て)

て　な　ら　い　さ　せ　て　て　ら　へ　あ　が　っ　て　が　く　も　ん　さ　せ　て

に　し　へ　む　い　て　も　な　む　あ　み　だ　ぶ　つ　ひ　が　し　へ　む　い　て　も

な　む　あ　み　だ　ぶ　つ　に　ー　し　も　ひ　が　し　も　ー　ご　ー　く　ら　く　よ

ご　く　ら　く　よ　ち　い　と　い　っ　か　ん　わ　た　い　た

(出発実音ホ、M. M. 126 採譜高木)

## 歌詞

ここのおきくは　なぜもの食わん  
腹が痛いか　夏病みするか  
腹も痛<sup>いと</sup>うない　夏病みもせぬ  
腹にねねこの　つぼみができて  
産むにや産まれず　墮ろすにや墮りず  
生まれた子が男の子なら

京へあがって\* (のぼりて) 手習いさせて  
 寺へあがって 学問させて  
 西へ向いても なむあみだぶつ  
 東へ向いても なむあみだぶつ  
 西も東も 極楽よ極楽よ  
 ちょいとっかんわたいた

\*小倉あきえさんが歌ったもの

この歌も、隣接地区の櫛原に同歌が見られる(曲番59)。旋律的には殆んど違いはなく、詞に於て、欠落していると考えられる部分「なんと医者どの お薬ないか………」が見られるだけである。

旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の陽旋法で、核音は、レ、ソ、である。

# 67. あったら松や (てまり唄)

演唱者 梅本まさえ

No67

あたらまつや - からまつや にしへさいたる  
 そのえだに きちまつおとこがすを掛けて  
 そのすのおろしにいったればあめがふるやら - きりが  
 まくやら - おれなんんだ おれなんだ

(出発実音ホ, M. M. 120 採譜高木)

## 歌詞

あたら松や から松や  
 西へさいたる その枝に  
 きちまつ男が 巣を掛けて  
 その巣の おろしに行ったらば  
 雨が降るやら 霧がまくやら  
 おれなんだ おれなんだ



この歌も、村内他地区の殆んどに同歌を見出すことが出来る。戸入（曲番1）、本郷（曲番17）、山手（曲番43）、さらに後述の下開田（曲番86）である。旋律的にも、あるいは詞に於ても、すべて同一であると云うことができる。

旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の音列を使った律旋法である。核音は、レ、とソである。

# 68. すすれすすれ （てまり唄）

演唱者 小倉あきえ

Na68



すすれ - すすれ いっ ばい す す れ いっ ばい すす たら  
おはぐろ つ け よ おはぐろ つ けたら くちべに さ せ  
よ くちべに さい たら おしろい は け よ おしろい  
は いたら ひとつ ま の か ど も と ま で た た け ひー ふう  
み よ いつ む な や こ こ と お

（出発実音二，M. M. 126 採譜高木）

## 歌詞

すすれすすれ 一杯すすれ  
一杯すすたら おはぐろつけよ  
おはぐろつけたら 口紅させよ  
口紅さいたら おしろいはけよ  
おしろいはいたら ひとつまのかども<sup>とお</sup>までたたけ  
ひ，ふ，み，よ，いつ，む，な，や，ここ，とお

ラ、ド、レ、ミ、ソ、の音列をもった陽旋法からなっている。核音は、ラ、レ、である。

同歌は、現在まで、戸入を除く全村で採集されている。本郷（曲番19）、門入（曲番37）、山手（曲番51）、櫛原（曲番62）、そして後出の下開田（曲番84）、塚の世代の違うところから採集できた曲（曲番74）である。旋律に於ても、詞に於ても殆んど違いはなく、所作をする様子も全く同じである。

## 69. じょりかくし (鬼あそび唄)

演唱者 梅本まさえ

No.69



(出発実音ト, M. M. 160 採譜高木)

## 歌詞

じょりがくしに くねんぼ  
まめんたに とーしまうって  
たんこんりきりきちょ

この歌の音組成は、二つの音、すなわち、この場合は、ソ、ラ、の音を使った最も単純なわらべうたで、核音は上の音、ラである。

同歌は、本郷(曲番4. 16)山手(曲番45)、櫛原(曲番55)に見られる。ここ同じ塚で採集された世代の若いところから採集した曲番75とは詞に於て全く同一であり、後者の方が前者にくらべて音域が広がっている。他地区の3曲と比べてみた場合、ここ塚の2曲は、詞に於て、意味不明で呪文的であるのに変りはないが、塚の方が極めて短くなっている。音域的にも、塚の方が狭く、単純な旋律である。

現段階まで、この、「くねんぼ型」が、戸入、門入の西谷川に見られなくて、本郷から始まる山手、櫛原、塚の東谷川沿いの地区にだけ見られるのは、興味ある点である。

## 70. かくかくかくれがさ (鬼きめ唄)

演唱者 梅本まさえ, 小倉あきえ

No.70



(出発実音ホ, M. M. 132 採譜高木)

## 歌詞

かくかく かくれがさ  
打出の小槌 すっぽろぽんのぽん

この歌も、二音から成る単純なわらべうたである。

同歌は、山手（曲番52）、壱原（由番56）にある。前者に比べて、ここ塚のものは、前出「じょりかくし」同様、短くきりつめられていて、極めて単純明快である。終りの節「すっぽろぼんのぼん」も前者では「すっぽんぼんのぼん」で、殆んど違いは見られない。

# 71. おおさいどりか （手おどり唄）

演唱者 梅本まさえ

No.71

お お さい ど り か さい ど り か べ に や の こ ん が い  
か ね こ う が い ま く ら も と に お い た れ ば  
ね ず み が こ そ こ そ す っ て ら て ん い ち の き に の き  
さ ん の き さ く ら ご よ ま つ や な ぎ や な ぎ の う ら で  
よ び い っ ち ょ う ひ ろ っ て お お も り こ も り く る ま に の し て  
そ り ゃ ひ け だ る ま そ り ゃ ひ け く る ま ぎ ん ぎ ろ ぎ ん の ぎ ん

（出発実音嬰へ，M. M. 152 採譜高木）

## 歌詞

おおさいどりかさいどりか  
べにやのこんがい かねこうがい  
枕元においたれば ねずみがこそそすってらてん  
一の木 二の木 三の木 桜 五葉松 柳  
柳のうらで よび一ちょうひろって  
おおもりこもり 車に乗して  
そりゃひけだるま そりゃひけくるま  
ぎんぎろぎんのぎん

いままでの歌がすべて陽音列を使っているのに対し、この歌はめずらしくも陰音列で歌われている。すなわち、ラ、シ、ド、の短三度の下に、ミの完全四度の音が加わった音列が使われている。核音は、ミ、ラ、である。後半は、同主調の関係で転調したとも考えることができる。

この手おどり唄「おおさいどり」は、ほぼ徳山村全村内で見られ、遊び方も全く同じである。ただし二つの系統に分けることが出来るようである。その一は、「それひけだるま、それひけくるま」で終るもの、これには、樋原（曲番60）、ここ塚、そして後出下開田（曲番83）がある。そして、ここ塚の歌に見られるように「ぎんぎろぎんのぎん」といった何か特別の言葉をつけて終ったのではないかと思われる。その二は、「いざや若い衆 花折り行こか」に続いていく系統である。これには、門入（曲番27）、山手（曲番49）、そして戸入（曲番2）が入る。現段階では、本郷のみ未採集であるが、この手おどり唄は遊びとともに、ほぼ全村に存在するであろうことが考えられる。

## 72. ねんねころいち（子守唄）

演唱者 小倉あきえ

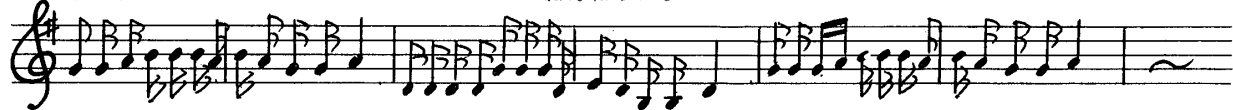
No.72



ねんねころいちー たけふな よ いちー たけにもたれて ーね んー ね んー しょ  
ねんねしてくりょー きょうは にじゅう ご にち あすは このこの ーた んー じょうー び  
たんじょにちにちー な にして ゆ わうー あずきぼたもち ーし てー ゆわー う



ねんねーんこん ねんねんー こー んー こん ねんねのおもりはどこへいた あのやまこえてー さとへい た



さとのをみやげになにも る た でんでんたいこに しょうの ふ え あめやーおこしや かぎぐる ま

（出発実音へ、M. M. 60 採譜高木）

### 歌詞

ねんねころいち たけふなよいち  
竹にもたれて ねんねんしょ<sup>\*</sup>（死んだげな）

ねんねしてくりょ 今日<sup>にち</sup>は二十五日  
明日はこの子の 誕生日

誕生日日<sup>にち</sup>日<sup>にち</sup>にしてゆわう  
あずきぼたもち してゆわう

ねんねんこん ねんねんこんこん

ねんねのお守は どこへ行た

あの山越えて 里へ行た

里のみやげに 何もろた

でんでたいこに しょうのふえ

あめやおこしや かざぐるま

.....未完

\*梅本まさえさんが歌ったもの

この歌は、もともとは二つの歌を中間部分ブリッジでつなぎ、続けて歌う形になっている。こうした子守唄の歌われ方は、前報第Ⅶ報曲番61の項で述べた通り、応々に見られる形である。同様なものとして、櫛原（曲番61）、門入（曲番34）がある。前段部分のみの同歌は、本郷（曲番14）、山手（曲番44）、下開田（曲番85）などがある。

旋法は、ド、レ、ミ、ソ、ラ、の呂旋法で歌われている。核音はド、ソ、である。後半はそれにレが核音として加わる。

# 〈塚のわらべうた〉その2

## 73. ここから見えるは （てまり唄）

演唱者 岩須あきの、橋本美代、横田志ず子

No.73

ここから見えるは なごやじゃないか なごやの こどもは

じんじょの こども ななつ やつから べにおし ろいで

ごもんの そとへー あすびに でたら おわかい しゅうやー

こわかい しゅうに だきしめ られて おちちが いたいで

はなして おくれ おちちが いとても はなせは できぬ



(出発実音嬰へ, M. M. 132 採譜高木)

## 歌詞

ここから見えるは 名古屋じゃないか  
 名古屋の子どもは じんじょの子ども  
 七つ八つから 紅おしろいで  
 ご門の外へ 遊びに出たら  
 お若い衆や 小苦い衆に抱きしめられて  
 お乳が痛いで 離しておくれ  
 お乳が痛<sup>いと</sup>ても 離せは出来ぬ  
 お盆がくるで 帯買っておくれ  
 赤いがよいか 青いがよいか  
 赤いもいやが 青いもいやが  
 ちょうせんばやりの 博多帯 博多帯  
 ちょいとっかんわたいた

前出曲番60「こっから見えるは」と全く同一である。同一地区で、親と子という世代の異なるところで採集したこの二曲は、親の世代から、子の世代へと、そっくりそのまま伝承されているといってもいいほどである。しかし、詳細に比較してみると二、三のことに気づく。その一は、親の世代の<sup>お</sup>節が若い世代にないこと。その二は、前者よりも後者の方が拍子がしっかりしていること。すなわち、最初から始まった拍子で最後まで通している。前者ではそれが混合拍子になっている。その三は、不思議なことに、詞に於て、前者の「赤いがよいか、白いがよいか」が、後者では「赤いがよいか、青いがよいか」と、色が変わってしまっていることである。大した違いではないといえそれまでだが、大変興味あることである。

## 74. すすれすすれ （てまり唄）

演唱者 岩須あきの、橋本美代、横田志ず子

No.74

すすれ すすれ いっぱい すすれ いっぱい

すすたら おはぐろつけよ おはぐろつけたら

くちべにさせよ くちべにさいたら おしろい

はけよ おしろいはいたら ねねさをおべ

よ ねねさをおんだら あたまのとおもたた

け ひ ふ み よ いつ む な や ことー

（出発実音へ，M. M. 126 採譜高木）

## 歌詞

すすれすすれ 一杯すすれ  
 一杯すすたら おはぐろつけよ  
 おはぐろつけたら 口紅させよ  
 口紅さいたら おしろいはけよ  
 おしろいはいたら ねねさを負べよ  
 ねねさを負んだら 頭の<sup>とお</sup>もたたけ  
 ひ、ふ、み、よ、いつ、む、な、や、ここ、とお

旋法は、ラ、ド、レ、ミ、の音列を使った陽旋法で、核音はレ、ラ、である。

この歌でも前曲同様、小倉あきえ氏の「すすれすすれ」（曲番68）と比較してみると、多少の違いが指摘できる。まず一つには、曲の出発が後者の方がしっかりしていること。次に、くり返し部分の旋律がやはりしっかりしていること、さらに詞に於て、前者では「ひとつまのかど」と、本人も意味不明の部分が、後者では「あたま」とはっきり部分を示した言葉になっていることである。そして、記憶の問題であろうが、前者では「ねねさを負べよ」の部分が欠落していたが、後者ではその部分は補

なわれていた。しかし、全体として、しっかり伝承されていたことが理解できる。

# 75. じょりかくし (鬼あそび唄)

演唱者, 岩須あきの, 橋本美代, 横田志ず子

No.75



(出発実音嬰へ, M. M. 112 採譜高木)

## 歌詞

じょりがくしに くねんぼ  
まめんたに とうしもうって  
たんこんりきりきちゃん

旋法は、ミ、ソ、ラ、の三音からなるテトラコードで、核音はラ。

曲番69の歌と比較するとき、二音から三音に音域が広がったことがいえるくらいで他に違いは見出せない。ほぼ完全な形で伝承されていると考えることができる。

# 76. おおさいどりか (手おどり唄)

演唱者 岩須あきの, 横田志ず子

No.76







(出発実音ホ, M. M. 144 採譜高木)

## 歌詞

おおさいどりかさいどりか  
 べにやのこんがい かねこうがい  
 枕元においたれば ねずみがこそこそすってらてん  
 一の木 二の木 三の木 さくら 五葉松 やなぎ  
 やなぎのもとで 弓一ちょ拾って  
 おおもりこもり 茶碗のかけを拾って  
 車に乗して それひけ車 それひけだるま

旋法は、ラ、ド、レ、の三つの音を使ったテトラコードで、核音は、前半がラ、後半がレ、である。

この歌も前出の三曲と同様に、ほぼ完全な形で伝承されている。しかし同様に比較してみると、一・二の違いを指摘することができる。まず一つは、使われている旋法が、陰と陽の違いがある。二つ目には、後者には最後の「ぎんぎろぎんのぎん」がないことである。しかし、演唱者による遊びの説明で、最後につき返してかえた方が負けで交替するのだそうである。そうだとすると、何かかけ声らしきものが必要となるだろうから、「ぎんぎろぎんのぎん」、その他これに類するものがあったと考えるのが妥当であろう。

## 77. おさら （お手玉唄）

演唱者 横田志ず子

№77



④ お ら ら ごじょうの は し

⑤ お さ ら ろく かん べん けい

⑥ お さ ら おはさ みおはさ み

⑦ お さ ら おての せ おての せ

⑧ お さ ら おこち り おこち り

⑨ お さ ら おひだり おひだり だりたり

⑩ お さ ら や ちゃらん や ちゃらん

⑪ お さ ら ち い は し こ ひーよ

⑫ お さ ら おおきい こ こ ひー よ

⑬ お さ ら い せ に い が た み か わ し ん しゅう ご う しゅう  
む さ し な ご や は こ だ て きゅう しゅう と う きょう やっこらせ どっこい しょ

(出発実音嬰へ, M. M. 116 採譜高木)

## 歌詞

- ①おさら にっしんせんそうにっしんせんそう (日清戦争) ……子玉をとりきるまで繰り返す
- ②おさら さーかんせいばつさーかんせいばつ (三韓征伐) ……子玉をとり切るまで繰り返す
- ③おさら よしつねべんけいよしつねべんけい (義経弁慶) …… 以下同様に

- ④おさら ごじょうのはしごじょうのはし（五条の橋）……  
 ⑤おさら 六かんべんけい 六かんべんけい……  
 ⑥おさら おはさみおはさみ……  
 ⑦おさら お手のせお手のせ……  
 ⑧おさら おこちり おこちり……  
 ⑨おさら おひだりおひだり……だりだり  
 ⑩おさら やちゃらんやちゃらん……  
 ⑪おさら ちいはしこーひーよ ちいはしこーひーよ……  
 ⑫おさら おおきいこーひーよ おおきいこーひーよ……  
 ⑬ おさら 伊勢，新潟，三河，信州，江州，武蔵，名古屋，函館，九州，東京，やっこらせどっ  
 こいしょ

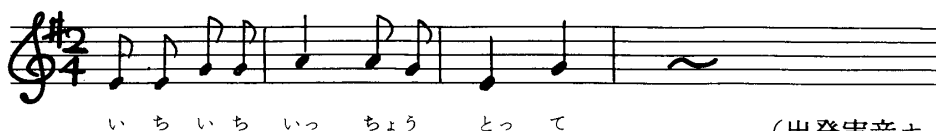
ここ塚では、お手玉のことを砂袋と呼んだとのことで、演唱者横田氏は、自分でその砂袋を用意してきて演じて見せてくれた。上記歌詞の番号を付した順に遊びを継続していくのである。例えば①，②，③，では、「おさら」で全てのお手玉を下にばらまき，その一つを親玉とし，その親玉を投げ上げている間に，「日清戦争」と歌いながら，下にまいてある子玉を二つとり込む，それを子玉がなくなるまで繰り返すのである。そしてそれが終わったら，再び「おさら」といって，全てのお手玉を下にまき，「三韓征伐」と歌いながら三つずつとりこむ，同様にして「義経弁慶」では四つ，という様に順次とり込む数を増やしていくのである。そして，⑥「おはさみ」⑦「お手のせ」，以下遊び方が，子玉を左手の指の間にはさむ，左手に乗せる，という様に遊び方が変化していき，最後の⑬「……やっこらせどっこいしょ」で一通りの遊びが終るのである。しかし，終りまでいくことは極めて稀で，途中で失敗したら，勿論相手と交替するのである。

お手玉唄が，遊びと同時にこの様に詳細に採集出来たのは，今回がはじめてである。この歌と遊びの類歌が，関東地方の一部地域に見られるが，ここ徳山にも見られたということは，伝承の妙とはいふものの不思議なことである。しかし，演唱者自身が述べていたことであるが，自分の子ども達には，この遊びを教えたことはなく，娘たちは知らないだろうとのことであった。遊び仲間の間で，伝えられていけばよいが，もし，本当に伝わっていないとするならば，誠に残念なことである。私たちも，機会を設けて，この遊びだけでもさらに詳細な記録として留めておきたい。

## 78. いちいちーちょうとって （おはじき唄）

演唱者 横田志ず子

Na78



（出発実音ホ，M. M. 104，採譜高木）

## 歌詞

いちいち一ちょうとって

おはじき遊びの時に、どこでも見られる歌である。ここ塚では、おはじきのことをげらと呼び、遊んだとのことである。遊び方も一般的で、二つの石の間を指、または他の石を通して後に当ててとるといった方法で、違いはない。

## 〈下開田のわらべうた〉

## 79. 今日発つか明日発つか (てまり唄)

演唱者 江崎さき

No.79

きょうたつ か あす たつ か きょう も た た ま い - あす も た た ま い  
 - さ ん じゅ ご ん ち は た つ け れ ど と う か は つ か は - ま - だ  
 た た ぬ ま だ た た ぬ ちょいと いっ かん わ た い た

(出発実音ニ, M. M. 112 採譜高木)

## 歌詞

今日<sup>た</sup>発つか 明日発つか  
 今日も発たまい 明日も発たまい  
 三十五日はたつけれど  
 十日、二十日はまだたたぬ まだたたぬ  
 ちょいと一かんわたいた

この歌の旋法は、前半11小節はド、ミ、ファ、ラ、の陰音列を使ったものであり、核音はミ。そして後半8小節に於ては、ド、レ、ミ、ソ、ラ、の陽音列に転調して終っている。西洋音楽でいうところの、同主調の関係で転調しているのである。したがって後半の核音も、前半と同音のソ（転調後の調の階名）である。

この歌の同歌あるいは類歌とみられるものに、本郷の斉藤氏が歌った「てんまりやてんまりや」（曲番6）がある。詞を比較すると、斉藤氏のものの一部分が、今回江崎氏のものとなっており、これだけで1曲として独立したものではなく、前部分が欠落し、途中から歌い出し、さらには後部分も欠落しているものと思われる。

## 80. おとらの前髪 （てまり唄）

演唱者 江崎さき

No.80



（出発実音ニ，M. M. 112 採譜高木）

## 歌詞

おとらの前髪 だれ分けた  
うつくしや うつくしや  
きりよは ごぼんにきり分けて

.....未完

この歌は、演唱者が、途中までしか思い出せなかった。山手で採集した「ここのおとらの」（曲番41）の同歌であろうと思われる。まだ、ほんの出だし部分で相当長い曲であったので忘れられても無理もないが、大変惜しいことである。江崎氏の場合、未完の曲がこの他にも2曲ほどあった。

旋法は、ド、ミ、ファ、ラ、の陰音列を使ったもので、核音はミ、である。

## 81. てんまりあがれば （てまり唄）

演唱者 江崎さき

No.81



（出発実音ニ，M. M. 112 採譜高木）

## 歌詞

てんまりあがれば、障子がやぶれる  
ついやつuitate きりやきりたて

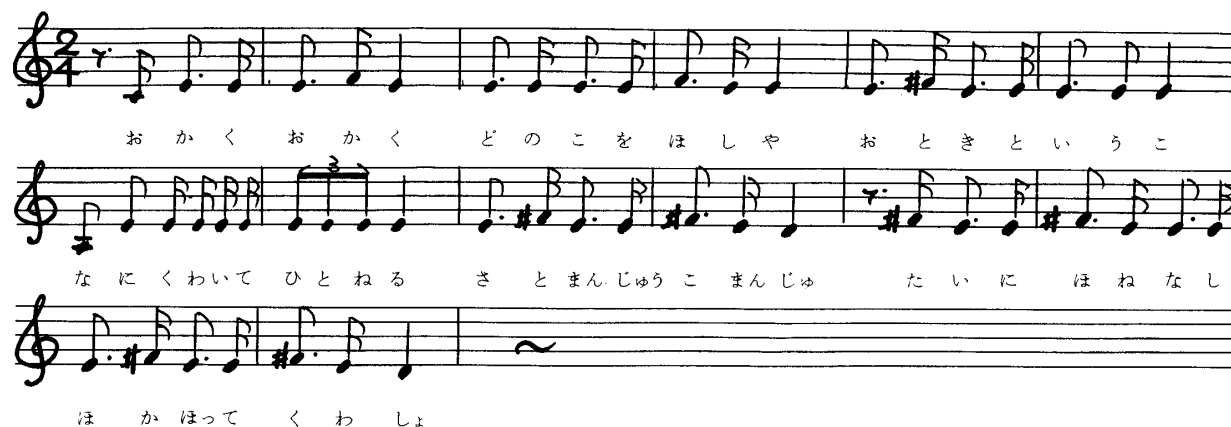
.....未完

この歌も未完で、思い出せないとのことで、他に同歌らしいものも見出していない現在、誠に残念である。

## 82. おかくおかく (子もらいあそび唄)

演唱者 江崎さき, 宮崎とき

No.82



お かく お かく ど の こ を ほ し や お と き と い う こ  
 な に く わ い て ひ と ね る さ と ま ん じ ゅ こ ま ん じ ゅ た い に ほ ね な し  
 ほ か ほ っ て く わ し ょ

(出発実音口, M. M. 112 採譜高木)

### 歌詞

おかくおかく どの子を欲しや  
 おときというこ なに食わいてひとねる  
 さとまんじゅ こまんじゅ  
 たいにほねなし ほかほって食わしよ

.....未完

この歌も途中までで、思い出せなかった。この子もらい遊びの同歌は、山手(曲番46)、櫛原(曲番58)でも見られた。

## 83. おおさいどりか (手おどり唄)

演唱者 江崎さき, 宮崎とき

No.83



お お さい ど り か さい ど り か べ に や の こ ん が い  
 ま - く ら も と に  
 か ね こ ん が い ね ず み が こ そ こ そ す っ て ら て ん  
 お い た れ ば



かん のん どう ま に ひ が く れ て い ち の き に の き  
 さ ん の き さ く ら さ く ら の も と に ゆ み い っ ち ェ う ひ ろ っ て  
 お お ゆ み こ ゆ み ち ェ わ ん の か け を く る ま に の し て  
 や れ ひ け く る ま そ れ ひ け く る ま ぎ ん ぎ ろ ぎ ん の ぎ ん

(出発実音ハ、M. M. 144 採譜高木)

## 歌詞

おおさいどりか さいどりか  
 べにやのこんがい かねこんがい  
 枕元においたれば ねずみがこそそすってらてん  
 かんのん堂まに 日が暮れて  
 一の木 二の木 三の木 さくら  
 さくらの元に 弓一ちょう拾って  
 おおゆみこゆみ 茶碗のかけを 車に乗して  
 やれひけくるま それひけくるま  
 ぎんぎろぎんのぎん

この歌は、塚（曲番71）と同じく「ぎんぎろぎん」型である。ただし旋法は、塚の陰に対し、ここ下開田のものは陽である。ラ、ド、レ、ミ、の音列を使い、核音は、ラ、レ、である。詞において、少しばかり欠落した部分があるが、ほとんど違いは認められない。

## 84. すすれすすれ （てまり唄）

No84 演唱者 宮崎とき



す す れ す す れ い っ ば い す す れ  
 い っ ば い す す た ら お は ぐ ろ つ け よ お し ろ い は い た ら  
 お は ぐ ろ つ け た ら く ち べ に さ せ よ  
 く ち べ に さ い た ら お し ろ い は け よ



(出発実音へ, M. M. 138 採譜高木)

## 歌詞

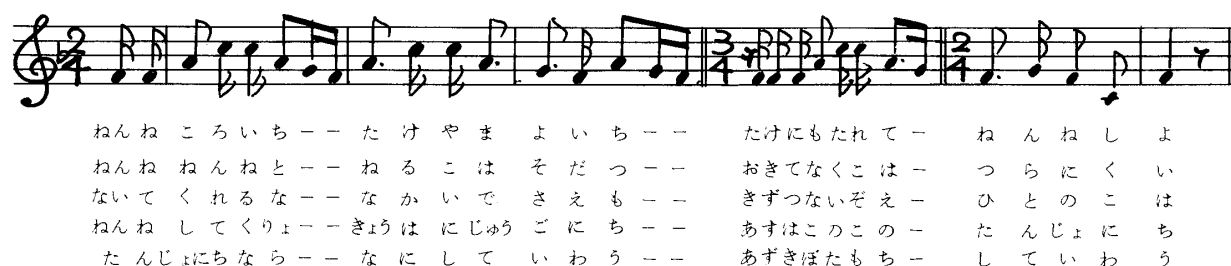
すすれすすれ 一杯すすれ  
 一杯すすたら おはぐろつけよ  
 おはぐろつけたら 口紅させよ  
 口紅さいたら おしろいはけよ  
 おしろいはいたら <sup>ひたい</sup>額の<sup>とお</sup>十もたたけ  
 ひ, ふ, み, よ, い, む, なな, や, ここ, とお  
<sup>とお</sup>十もたたいたら 一かんわたいた

ラ, ド, レ, ミ, の音列を用いた陽旋法で, 核音は, ラ, とレである。この歌は, 前出塚の二曲(曲番68, 74)と同様, 門入, 本郷, 山手, 櫛原のものと比べても, 多少の欠落部分はあるものの, ほとんど違いは認められない。

## 85. ねんねころいち (子守唄)

演唱者 宮崎とき

No.85



(出発実音へ, M. M. 58 採譜高木)

## 歌詞

ねんねころいち たけやまよいち  
 竹にもたれて ねんねしよ  
 ねんねねんねと ねる子は育つ



起きて泣く子は つら憎い

泣いてくれるな 泣かいでさえも  
気づつないぞえ 他人<sup>ひと</sup>の子は

ねんねしてくりょ 今日は二十五日  
明日はこの子の 誕生日<sup>にち</sup>

誕生日なら なにして祝う  
あずきぼたもち して祝う

旋法は、ド、レ、ミ、ソ、の音列を用いた呂旋法で、核音は、ド、ソである。ほぼ全村に見られる歌で、ほとんど違いは認められない。

# 86. あったら松や （てまり唄）

演唱者 江崎さき

№86

あたらまつやーからまつやにしにさいたるそのえだ  
にきしまつおとこがすを掛けてそのすを  
おろしにいったならあめがふるやらーきりが  
まくやらーおーれなんだおれなんだちよいといっかん  
わたいた

（出発実音ハ，M. M. 116 採譜高木）

歌詞

あったら松や から松や  
西にさいたる その枝に

きしまつ男が 巢をかけて  
 その巢を おろしに行ったなら  
 雨が降るやら 霧がまくやら  
 おれなんだ おれなんだ  
 ちょいと一かんわたいた

この曲も、門入、櫛原を除く全村で採集されており、基本的には、違いを認めることができない。  
 旋法は、レ、ミ、ソ、ラ、ド、の音列を用いた律旋法で、核音はレとソである。

### 87. わしのうしろの (てまり唄)

演唱者 宮崎とき

No.87

わすいにさおみちよけほなこ  
 一ずち一ん一っ一ー一そ  
 しめわばらしきんざろに  
 のがのののろりべもりがもの  
 うさやややざしもざほかこ  
 しん一ーしんちろしろななづ  
 ろばつつつきま一ぎりししま  
 のんものはいたにとていに  
 ちたばいせごしはすななち  
 しち一うばぎなえかか  
 ばおたこけごつよたしはつ  
 たりばとれまめなんない  
 にてたにどいてをらすすいて

い ち も ん や 一 へ 一 も つ て て も  
 に 一 ん も ん や 一 へ 一 も つ て て も  
 ち か と も た ら 一 べ に じゃ た べ に じゃ た ちょいと

いっ かん わ た い た

(出発実音ト, M. M. 126 採譜高木)

#### 歌詞

わしのうしろのちしゃ畑に 雀が三羽たちおりて  
 一羽のやつもばたばた 二羽のやつもばたばた  
 三羽のやつものいうことにや おらん座敷はせばけれど  
 みしろ三枚ごぎ五枚 ちょきり七枚しきつめて  
 よんべ貫うた花嫁を 今朝も座敷にすえたなら

ほろりほろりと泣かしゅんす 何が悲しゅうて泣かしゅんす

何も悲しいことはない 小袖のこづまに血がついて

\*一文屋へ持ってても 受取らず

二文屋へ持ってても 受取らず

三文屋へ持ってたら 受取って

血かと思ったら 紅じゃった 紅じゃった

ちょいと一かんわたいた

一文屋，二文屋，三文屋……質屋のこと

この曲の同歌は，本郷（曲番10）と門入（曲番36）で採集されている。中でも，隣の地区である本郷のものとは，詞，施法とも殆んど違いはなく，詞に於て，「一文屋………受取って」までの部分が，ここ下開田のものに加わっている。施法は，ド，レ，ミ，ソ，ラの呂旋法で，核音は，レ，ソである。

# 88. こっから見えるは （てまり唄）

演唱者 江崎さき，宮崎とき

No88



こっから見えるは なごやじゃないか なごや こどもは  
 じゅんじゅな こども な なつ やつ からべ におしろいで もんの  
 そとへと あすびに でたら おわかいしゅうーやー こわかい  
 しゅうーに だきしめられて ちちがいたいで はなして おくれ  
 おちちがいとても はなせん からの ぼんがくるやら  
 おびこうて おくれ あかいが よいかー しろいが よいか  
 あかいも いやがー しろいも いやが とうせん はやりの



ー は か た お び は か た お び ちよいと いっ かん わ たい た

(出発実音変ホ, M. M. 116 採譜高木)

### 歌詞

こっから見えるは 名古屋じゃないか  
 名古屋子どもは じゅんじょな子ども  
 七つ八つから べにおしろいで  
 門の外へと遊びに出たら  
 お若い衆や小若い衆に 抱きしめられて  
 乳が痛いではなしておくれ 乳が痛てもはなせんからに  
 盆がくるやら 帯<sup>い</sup>買<sup>い</sup>うておくれ  
 赤いがよいか 白いがよいか  
 赤いもいやが 白いもいやが  
 とうせんはやりの 博多帯 博多帯  
 ちよいと一かんわたいた

この曲も、戸入を除く全村で採集されている。基本的な違いは見出せない。旋法は、ド、レ、ミ、ソ、ラ、の呂旋法である。

### 89. ぜんまいわらび (鬼きめ唄)

演唱者 江崎さき, 宮崎とき

No.89



ぜん ま い わ ら び な ん で こ し え が ん だ お や の ひ に え び く っ て

そ れ で こ し え が ん だ

(出発実音ホ, M. M. 104 採譜変ホ)

### 歌詞

ぜんまいわらび <sup>\*</sup>なんで腰えがんだ  
 親の日にえび食って, それで腰えがんだ  
<sup>\*</sup>えがむ……曲がる, かがむ

この曲は、本郷で採集されたもの（曲番13）と同歌である。ただし、本郷との違いは、わがむ→えがむ、さかな食って→えび食って、と変っている。下開田では、方言として、曲がることを、えがむというのだそうであって、本郷とは違うとのことであった。

旋法は、ラ、ド、レ、ミの音列を用いた陽旋法で、核音は、ラ、レである。

### III

#### 〈徳山村のわらべうた分布状況〉

表1は、私たちが現在までに徳山村内で採集した89曲のわらべうたを、歌別、種別、地区別に分類し、表にしたものである。複数の地区にまたがる同歌を1曲として整理すると、表に示す如く、40曲にまとめることができる。すなわち、てまり唄が19曲、鬼あそび、鬼きめ唄が11曲、手おどり、お手玉、おはじき唄が4曲、縄とび、片足とび唄が2曲、子守唄が4曲の計40曲である。

この中では、圧倒的にてまり唄が多く、ほぼ半数の、全40曲中19曲（延89曲中46曲）にも達する。地区別にみても、7つの地区のほとんどで、てまり唄を数多く採集することができた。全国的にみても、伝承わらべうたの中ではてまり唄が最も多いということが、一般的であるが、ここ徳山村という限られた地内でも、そのことが証明された。

同歌の分布状況は、今回の塚、下開田で採集した27曲を加えて、その傾向が一層はっきりしてきた。

その一は、ほぼ村内全域に存在するであろうことが推測されるものが出てきたことである。すなわち、「おおさいどりか」（曲番83, 49, 60, 71, 76, 2, 27）, 「こっから見えるは」（曲番9, 88, 39, 57, 63, 73, 24）, 「すすれすすれ」（曲番19, 84, 51, 62, 68, 74, 37）, 「あったら松や」（曲番17, 86, 43, 67, 1）, 「ねんねころいち」（曲番14, 85, 44, 61, 72, 34）, の5曲である。たとえば、「おおさいどりか」の手おどり唄は、本郷を除く全地区で見られ、遊び方もほぼ同一である。地域的に見て、本郷をはさんで上流の山手、下流の下開田で、このわらべうたが見出されるということは、本郷では未採集ではあるが、必ずや存在し、採集できると考えられる。

その二は、下開田、本郷を経由して山手、樋原、塚の東谷川沿いの地区に見られるものである。現段階までのところで、戸入、門入の西谷川地区では未採集であるというだけのことも知れないが、以下にあげる6曲、「ここのおとらの」（曲番80, 41, 64）, 「ここのおきくは」（曲番42, 59, 66）, 「じょりかくし」くねんぼ型（曲番4, 16, 45, 55, 69, 75）, 「かくれんぼにかくれがさ」打出の小槌型（曲番52, 56, 70）, 「おかくかく」（曲番82, 46, 58）, 「ねんねん坊の」（曲番47, 61, 72）である。

その三は、下開田、本郷を経由して戸入、門入の西谷川沿いの地区に、現在までのところ見られるものである。それは以下の2曲、「わしんうしろの」（曲番10, 87, 36）, 「ぜんまいわらび」（曲番13, 89）である。

以上三つの系統に分けた以外に、そのいずれにも、現段階では分類出来得ないものが四つ目にある。それは以下の4曲、本郷、下開田の「てんまりやてんまりや」（曲番6, 79）, 本郷、塚の「れんげの花と桜の花と」（曲番5, 7, 11, 65）, 山手、門入の「こんめおした」（曲番26, 48）, 戸入、塚の「いちいちちょうとって」（曲番23, 78）である。これらの曲は、本郷、下開田の様に隣接したケース以

外は、東谷川と西谷川に大きく離れているケースである。これらのケースも、いずれ、調査の進展によって、上記三つの系統に分類することができるであろうが、現段階では、それをいうまでには至らない。

残りの23曲のわらべうたは、いずれも現在まで、一地区のみで採集されたものであり、村内で同歌の存在が未確認のものである。勿論これらの中で、今後の調査で同歌の採集が期待される。

以上、徳山村のわらべうた分布状況について、①徳山村内全域に存在する、②東谷川沿い地区に存在する。③西谷川沿い地区に存在する。④現段階では①、②、③に仕分けできないもの。⑤現段階では一地区のみで採集したもの。の五つのケースに分類することができる。

これらのことから、ことに④、⑤のケースにあたる曲が25曲ということは、まだまだわれわれの調査が目的意識的ではなく、演唱者から得られた素材をそのまま受けとり、演唱者の記憶を掘り起すところまで至っていないということである。いずれにしても、今後の調査においては、表1の余白を少しでも埋められるような目的意識的調査活動が必要であり、第二段階の調査活動を早急にすすめることを痛感するものである。

## ま と め

今回の調査では、7名の演唱者から計27曲のわらべうたを採集することが出来た。そして、村の入口である下開田と、最奥の塚という離れた二つの地区で、多くの同歌を採集できたのも大きな成果である。

この稿をもって、徳山村内8地区のうち、上開田を除く7地区を調査報告したこととなる。上開田地区の調査を早急にすすめると同時に、現在までに得た多くの資料をもとに、次の段階に調査の歩をすすめたいと考える。

第2次調査に於ける課題の第一は、同歌の存在の確認作業を一層すすめることである。ことに、採集曲数の少ない戸入、未調査の上開田の調査が急がれる。

第二には、世代の異なる演唱者からの採集活動をすすめることである。今回の塚、前々回のの門入の様に、二つの世代に亘って調査出来た地区もあるが、その他の地区に於ても同様な調査がさらにすすめられなければならない。

以上、二つの課題を、第二段階の調査における当面の課題として、研究をすすめたいと考える。

おわりに、今回の調査にあたって、さまざまな方々の協力を頂いた。

徳山小学校教諭篠田通弘氏、徳山中学校教諭大牧富士夫氏には、演唱者の紹介に一方ならぬお世話を頂き、誠に感謝にたえない。あらためてここに深大なる謝意を表する次第である。

現地の小沢喜治氏には、演唱者への中介の労をとって頂き、そのご厚意に深く感謝する次第である。

また、演唱者の七名の方々にはここにあらためて深大なる謝意を表する。

(1982. 11. 1. 受理)

表1 徳山村のわらべうた分布状況

題 名	分 類	本 郷	下開田	山 手	樋 原	塚	戸 入	門 人
あったら松や	て ま り 唄	17	86	43		67	1	
でんでんたくは	〃	3・15						
れんげの花と桜の花と	〃	5・7・11				65		
てんまりやてんまりや	〃	6	79(部分)					
たしかにたしかに	〃	8						
こっから見えるは	〃	9	88	39	57	63・73		24
わしんうしろの	〃	10	87					36
かいかいでまろ	〃	18						
すすれすすれ	〃	19	84	51	62	68・74		37
とんとんとべさ	〃						20	
みやの前から	〃						21	
いっちょめのぶんど	〃						22	
たけの子が出だす	〃							25
げんごろどこいきやる	〃			40				
ここのおとらの	〃		80	41		64		
ここのおきくは	〃			42	59	66		
おしろのせおにさのせ	〃			50				
ここのおばさ	〃				54			
てんまりあがれば	〃		81					
じょりかくし (くねんぼ型)	鬼 あ そ び 唄	4・16		45	55	69・75		
じょりかくし (じょんじょん型)	〃							38
なかのなかの小坊主	〃							31
坊さん坊さんどこいくね	〃							32
ぜんまいわらび	鬼 き め 唄	13	89					
かあかあ勘三郎	〃							28
びんびんこのつ	〃							29
ひとりふたりはいめの子	〃							30
かくれんぼにかくれがさ (打出の小槌型)	〃			52	56	70		
かくれんぼにかくれがさ (みのきて型)	〃			53				
おかくかく	子もらいおそび唄		82	46	58			
おおさいどりか	手 お ど り 唄		83	49	60	71・76	2	27
こんめおした	お 手 玉 唄			48				26
おさら	〃					77		
いちいちーちょうとって	お は じ き 唄					78	23	
おおなみなみ	縄 と び 唄	12						
ちんこばあらば	片 足 と び 唄							33
ねんねころいち	子 守 唄	14	85	44	61(前半)	72(前半)		34(後半)
ねんねん坊の	〃			47	61(後半)	72(後半)		
ねんねんねりの木	〃							34(前半)
ことしはじめて	〃							35

※数字はいずれも曲番号

表2 徳山村採集わらべうた一覧 その2

曲番	題 名	分 類	採集地	要集年月日	演 唱 者	所 載
63	こっから見えるは	て ま り 唄	塚	1982・8・27	梅 本 ま さ え	第X報(9集)
64	さんがんまえがみ	て ま り 唄	塚	"	梅 本 ま さ え	"
65	れんげの花と桜の花と	て ま り 唄	塚	"	梅 本 ま さ え	"
66	ここのおきく	て ま り 唄	塚	"	梅本まさえ・小倉あきえ	"
67	あったら松や	て ま り 唄	塚	"	梅 本 ま さ え	"
68	すすれすすれ	て ま り 唄	塚	"	小 倉 あ き え	"
69	じょりかくし	鬼 あ そ び 唄	塚	"	梅 本 ま さ え	"
70	かくかくかれがさ	鬼 き め 唄	塚	"	梅本まさえ・小倉あきえ	"
71	おおさいどりか	手 お ど り 唄	塚	"	梅 本 ま さ え	"
72	ねんねころいち	子 守 唄	塚	"	小 倉 あ き え	"
73	ここから見えるは	て ま り 唄	塚	1982・9・25	岩須あきの・橋本美代子 横 田 志 ず	"
74	すすれすすれ	て ま り 唄	塚	"	"	"
75	じょりかくし	鬼 あ そ び 唄	塚	"	"	"
76	おおさいどりか	手 お ど り 唄	塚	"	岩須あきの・横田志ず子	"
77	おさら	お 手 玉 唄	塚	"	横 田 志 ず 子	"
78	いちいちーちょうとって	お は じ き 唄	塚	"	横 田 志 ず 子	"
79	今日発つか明日発つか	て ま り 唄	下開田	1982・9・25	江 崎 さ き き	"
80	おとらのまえがみ	て ま り 唄	下開田	"	江 崎 さ き き	"
81	てんまりあがれば	て ま り 唄	下開田	"	江 崎 さ き き	"
82	おかくおかく	子もらいあそび唄	下開田	"	江崎さき・宮崎とき	"
83	おおさいどりか	手 お ど り 唄	下開田	"	江崎さき・宮崎とき	"
84	すすれすすれ	て ま り 唄	下開田	"	宮 崎 と き	"
85	ねんねころいち	子 守 唄	下開田	"	宮 崎 と き	"
86	あったら松や	て ま り 唄	下開田	"	江 崎 さ き き	"
87	わしのうしろの	て ま り 唄	下開田	"	宮 崎 さ き	"
88	こっから見えるは	て ま り 唄	下開田	"	江崎さき・宮崎とき	"
89	ぜんまいわらび	鬼 き の 唄	下開田	"	江崎さき・宮崎とき	"